

N

EWS
LETTER芝浦工業大学
教育イノベーション推進センター
ニュースレター

VOL. 3

発行 / 芝浦工業大学 教育イノベーション推進センター

Contents

2

「スーパーグローバル大学創成支援」
採択決定
～新たな理工系人材育成モデル
「SHIBAURAモデル」を世界に発信～

3

JMOOC：大規模公開オンライン
講座

4

第1402回IR部門委員会
ワークショップに参加して第1403回IR部門委員会
ワークショップに参加して

5

修学の継続に向けた
“こころの健康”を守る取り組み

6

「授業における創意工夫」
実践事例シリーズ 第1回
ビジネスエスノグラフィ

7

平成26年度教育改革ICT戦略大会に
参加してSPOD (四国地区大学教職員能力開発
ネットワーク) への参加について

8

SCOTとして経験したことと自身の成長
(公財) 日本工学教育協会 平成26年度工
学教育研究講演会 オルガナイズドセッ
ションに参加して

TOPICS

▶▶▶ 大学教育再生加速プログラムの
平成26年度取組として、以下
の講演会を開催

題目：

「反転授業——主体的な学びを引き出す
アクティブラーニングの取組——」山梨大学 工学部 電気電子工学科
埴 雅典 教授日時：2014年11月21日(金)
16時20分～17時20分場所：豊洲キャンパス
交流棟5階501教室

※大宮キャンパス、芝浦キャンパスに同時中継

対象：本学教職員

大学教育再生加速プログラム(AP)採択決定

芝浦工業大学の教育への取組が、文部科学省の平成26年度「大学教育再生加速プログラム(AP)」に採択されました。

このプログラムは国として進めるべき大学教育改革を一層推進するため、教育再生実行会議等で示された方向性に合致した先進的な取組を支援することを目的としており、本学はテーマⅠ「アクティブ・ラーニング」、テーマⅡ「学修成果の可視化」の複合型に申請し、採択されました(申請件数88件、採択件数21件)。

今回採択されたプログラムでは建学の精神「社会に学び社会に貢献する技術者の育成」の下に、「統合的問題解決能力を備えた世界(社会)に貢献できる技術者」の育成を教育目標として定め、学生の主体的な学びを促し、学修成果の可視化の為に以下の取組(一部)を行います。



▲「大学教育再生加速プログラム」ロゴマーク

4年間の体系的・組織的な
アクティブ・ラーニング(※学生の能動的学修)改革

本学では実験、実習、PBL(Project/Problem-Based Learning | 課題解決型学習)を通して学生が意欲的に学修に取り組める環境整備を進めており、一部の学部では学部、大学院の一貫した教育体系に講義とPBLを位置づけ、組織的なアクティブ・ラーニングを実施していますが、本取組では全学部で4年間の体系的かつ教員組織としてのアクティブ・ラーニングの教育プログラムを構築します。特に講義科目へのアクティブ・ラーニングの導入により学生の意欲を高めるため、学修マネジメントシステム(LMS)と連携した、双方向システムの導入整備を進めます。

学修成果の可視化と学生の学修時間のPDCA
サイクルによる保証

学生の学修時間を増加し、保証するPDCAサイクルを構築します。

教育プログラムの設計段階(Plan)で、シラバスを充実化し、予習、復習の具体的な記述に加え、学修時間も明示します。

実行段階(Do)では、e-Learning(情報技術を用いて行う学修)等の双方向システムで学修を担保し、学修時間をシステムで計測します。

評価段階(Check)では、学修ポートフォリオやルーブリック(学修到達状況を評価するための評価基準表)、学修時間を把握し、さらに改善段

階(Act)では、評価結果を踏まえた、教職学協働のワークショップにより改善を行います。

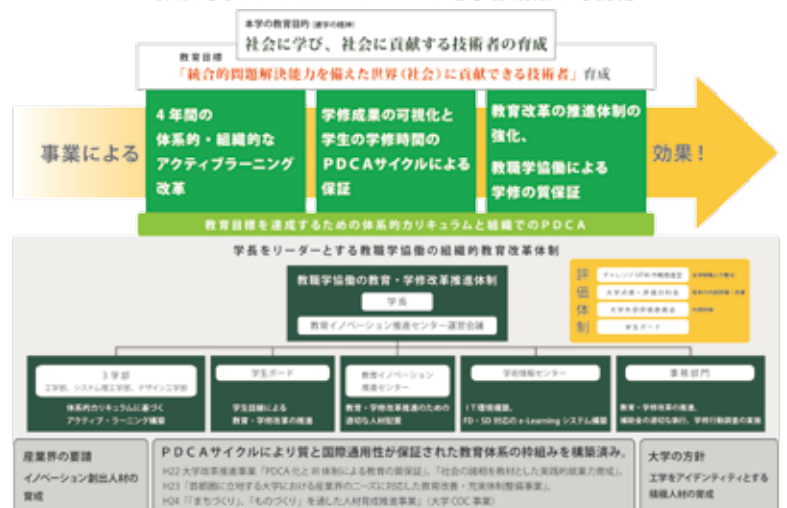
教育改革の推進体制の強化、
教職学協働による学修の質保証

本学がこれまで進めてきた教職員に、学生を加えた教職学協働の教育改革体制を強化します。

毎年2回、全学科の教員代表、各部署の職員代表、大学院生で実施している教育改革のための全学ワークショップの活動を強化し、参画している教職員が核となり、全学かつ全教職員でのPDCAサイクルが回る仕組みを構築します。

また、学生、卒業生、企業向けアンケートの全学での実施による教育プログラムの評価・改善を進めるほか、学修行動調査とジェネリックスキル試験PROGを全学で実施し、学修行動調査と試験の相関を取ることで、学生の能力を向上させる行動を明確にし、データに基づく教育改善を行います。

体系的なアクティブ・ラーニングと学修成果の可視化



▲本事業概要図

「スーパーグローバル大学創成支援」 採択決定 ～新たな理工系人材育成モデル 『SHIBAURAモデル』を世界に発信～

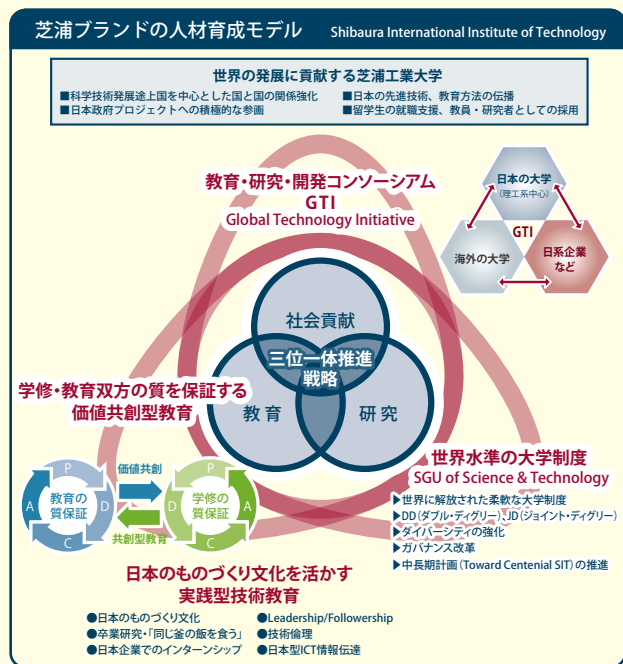
2014年9月26日、芝浦工業大学は、文部科学省の平成26年度国際化拠点整備事業費補助金「スーパーグローバル大学等事業 スーパーグローバル大学創成支援(タイプBグローバル化率引型)」に私立理工系大学で唯一採択され、10年間にわたる支援を受けることが決定しました。

これを受け、芝浦工業大学の新たなグローバル化構想「価値共創型教育を特徴とする理工系人材育成モデルの構築と世界の発展への貢献」がスタートします。

独自の教育プログラムや国内・国外の大学や企業とのコンソーシアムでの活動を通して「世界で活躍する理工系人材育成」のためのモデルを構築します。そしてこれを『SHIBAURAモデル』として、理工系を中心とした国内、海外の大学と共有していくことにより、世界をリードする理工系大学をめざしていきます。

申請区分) スーパーグローバル大学等事業 スーパーグローバル大学創成支援(タイプBグローバル化率引型)
構想名称) 価値共創型教育を特徴とする理工系人材育成モデルの構築と世界の発展への貢献

価値共創型教育を特徴とする 理工系人材育成モデルの構築と 世界の発展への貢献



本構想の目的

01 価値共創型教育による実践型技術者の育成

02 世界水準の大学制度の実現 03 教育・研究・開発コンソーシアムの構築

育成すべき人材像 コミュニケーション能力/問題発見解決能力/メタナショナル能力/技術経営能力

日本政府プロジェクト等の
幹事校・委員・事務局を務めた
豊富な経験と実績

国内・国外大学への芝浦モデルの展開

①学修・教育双方の質を保証する「価値共創型教育」

教育の質を保証するために、以下のPDCAサイクルを実践します。

P: 教員による学習・教育目標(アウトカムズ)の設定

D: グローバルPBL、海外インターンシップをはじめとするアクティブラーニングを取り入れた学習の実施

C: 学習達成度の客観的評価基準(ルーブリック)と社会人基礎力試験(PROG)の導入

A: 評価結果のフィードバックによる改善

これにより、理工系人材に必要な能力「コミュニケーション能力」「問題発見解決能力」「メタナショナル能力」「技術経営能力」を身につける上での達成度合いを把握、さらなる学修意欲を促進すると共に、教育の質の向上につなげ、教員・学生が相互に価値を共創していく「価値共創型教育」を実現します。

②世界水準の大学制度

大学のグローバル化の進む社会に柔軟に対応し、

- ・留学生数を全学生の30%まで拡大
- ・全学生を在学中に一度は海外留学・研修に派遣
- ・英語だけで卒業できるコースの設置
- ・英語での開講科目数600科目

を達成し、アジア工科系大学トップ10を目指します。

③教育・研究・開発コンソーシアム

国内の大学、海外の大学、海外の企業を中心としたコンソーシアム[Global Technology Initiative (GTI)]を構築し、研究連携や産学連携のプロジェクト、アクティブラーニング(グローバルPBLや海外インターンシップ)や教職員の相互派遣・交換などを積極的に実施します。

これら学生・教員の価値共創による効果的な学修、海外の大学・企業との連携による各種プロジェクトの実施、および大学の制度改革を通して、世界で活躍する理工系人材を育成するためのプログラムを構築し、これを「SHIBAURAモデル」として、芝浦工業大学内のみならず、国内、海外の大学とも共有します。

TOPICS

▶▶▶ 2014年度職員対象のSD研修として「大学教育再生加速プログラム」および「スーパーグローバル大学創成支援事業」について、概要の説明およびその内容について全職員が一同にディスカッション。

日時: 2014年11月4日(火) 10時～12時
場所: 豊洲キャンパス 交流棟5階501教室



※スーパーグローバル大学創成支援とは

世界トップレベルの大学との交流・連携を実現、加速するための新たな取組や、人事・教務システムの改革、学生のグローバル対応力育成のための体制強化など、国際化を徹底して進める大学を文部科学省が重点的に支援。

○トップ型:世界ランキングトップ100を目指す力のある大学を支援

○グローバル化率引型:これまでの実績を基に更に先導的試行に挑戦し、我が国社会のグローバル化を牽引する大学を支援(芝浦工業大学はグローバル化率引型に採択)

JMOOC：大規模公開オンライン講座 社会人学生市場の開拓と学部教育への展開の可能性

工学マネジメント研究科

田中 秀穂 研究科長・教授

工学マネジメント研究科MOTは、日本オープンオンライン教育推進協議会(JMOOC)に参加し、公認配信プラットフォームである「gacco(ガッコ)」を通じて授業の配信を行うことを決定しました。JMOOCでの授業配信は、工科系単科大学としても、技術経営専門職大学院としても初の試みです。

社会人学生市場へのアプローチ手段

近い将来、学生獲得の主戦場は社会人学生市場になります。18歳人口は2018年から減少し始め、2024年までに10万人以上減少します。18歳を主要顧客とする限り、日本の大学生市場規模は大幅に縮小するのです。一方で、社会人の学び直しの潜在需要は大きく、日本の大学に残された最後のブルーオーシャン市場です。しかし、現状では社会人に対して有効な戦術を打ち出すことができていません。この市場へのアプローチ手段の中で、JMOOCは規模、訴求力ともに有望なものです。gaccoの会員数は2014年5月の段階で5万人をすでに突破しています。4週間の授業を行うので、教育の中身のアピールも充分にできます。また10分程度のビデオで構成し、オンデマンドで配信するので、忙しい社会人でも履修可能です。MOTはこのJMOOCの有用性に早くから着目してきました。

JMOOCに期待する効果

JMOOCに期待する効果は3つあります。一つは、講義準備の過程で教員が工夫を施すことで、教育の質を高める効果です。多数が履修するという緊張感もありますが、ビデオを教員自身で確認することにより内容の向上が図れます。また他の教員からの助言も得やすく、履修者からのフィードバックもあります。もう一つは、多数の履修者にアクセスできることから、大学のブランド力向上、MOTの社会認知度の向上が図れることです。さらに大きな期待を寄せるもう一つの効果が、これまで充分にできなかった社会人へのアプローチです。現時点では、JMOOC会員の多くが社会人であると考えられます。多くが経営系の講座の受講を希望しているという調査もあり、社会人学生候補者にアクセスできることを期待しています。

開講するJMOOC授業の内容と課題

今回の授業は、「イノベーション入門」と題した新製品開発に絡めたMOTの入門講義です。対象はメーカーなどの社

員を想定していますが、学部学生でも受講可能です。開講は2014年11月から12月です。授業は4週間、1) 導入～事業環境の分析とターゲットの設定、2) 知的財産権と特許データベース、3) エスノグラフィによる要求開発とプロジェクト管理、4) 組織行動と組織改革、全体のまとめ、という内容です。上記に加え、反転学習コースも芝浦キャンパスにて開講します。

JMOOCへの参加準備はgaccoからの様々な支援を得て行いました。開講までの詳細なスケジュールリング、受講者募集サイトで掲示するコースカードの作成、プロモーションビデオの撮影など、のサポートがありました。本編の撮影も2日間かけて順調に終了しました。

一方で課題としては、費用と著作権処理の問題があります。撮影には最低でも50万円程度が必要で、映像効果を入れたりすれば費用がかさみます。また受講者の掲示板管理のための要員も必要です。大学として本格的にJMOOCに取組み、独自の撮影場所の確保やノウハウを積むことが今後必要でしょう。また講義資料の著作権処理についてはJMOOCやgaccoの支援はなく、担当教員が実施することになります。第三者の著作物を一切使用せずに資料作成することが可能であれば問題ありませんが、充分な説明が出来ない場合も多いでしょう。なんらかの支援システムが必要と思います。

JMOOCの学部教育における活用

JMOOCは社会人市場に対応できるプラットフォームですが、さらに学部教育などでも広範に活用することができます。例えば、高校生を対象とした基礎的な講義を配信して本学を知ってもらうとともに優秀な高校生を囲い込む取組みや、基礎的で知識伝授が中心となる学部での工学教育の一部をJMOOCで開講する、などです。芝浦工業大学がJMOOC活用の先駆者として、さらなる活用を図ることができるよう、MOTとしても協力していきたいと思っています。

gaccoスタッフによる授業のプロモーションビデオ撮影の様子



第1402回IR部門委員会ワークショップに参加して

工学部電気工学科・教授
教育イノベーション推進センター員
長谷川 忠大

教育イノベーション推進センター IR部門委員会は年2回のワークショップを予定しており、真夏の7月26日(土)14時～17時、豊洲校舎6階PC実習室1にて、初回のワークショップを開催しました。2014年度のIR部門委員会の取り組むべき主要課題は、1)卒業研究・実習形式授業のアセスメント方法の確立、2)学生を主体的に学習させる仕組みの構築、と2つあり、今回のワークショップにおいては1)に対応した卒業研究におけるループリックによる評価経験の紹介と、2)に対応したラーニングポートフォリオの体験講習を実施しました。学長、副学長をはじめ、各学科・科目から選出されたIR部門委員、学生課・大学院事務課などの職員、グローバル人材育成事業の委員、およびグローバルLFの学生も含めた計37名の参加者による教職学協働でのワークショップになりました。

ワークショップは村上学長の挨拶により開会し、前半は電気工学科、土木工学科、デザイン工学科と電子情報システム学科から、2013年度の卒業研究のループリックの実施経験の発表がありました。これまでのIR部門などの活動によって全学科において卒業研究にループリックが導入されており、ループリックをどのように利用すればよいかの段階ではなく、すでに各学科とも工夫をして利活用しています。そのため、今回は各学科の経験を共有し、今年度のPDCAサイクルによるループリックの改善作業に活用することを主眼としました。ループリックに関しては、各学科



体験講習の様子

の経験共有もさることながら、学外も含めたループリックの最適な設計事例および活用事例を収集して紹介し、ブラッシュアップさせることが今後のIR部門の役割であると感じました。

後半は、ラーニングポートフォリオのパターン1とパターン2-2の体験講習を実施しました。e-ポートフォリオは文部科学省も推進している課題で、本学は他にさがけて準備・導入をしていますが、利用者が少ないことが課題でした。そこで、実際に体験することにより、良い点、悪い点、改善点について意見交換や情報を共有し、本学のラーニングポートフォリオの改善と利用者の増加を目指すことを目的としました。体験講習後は5班に分かれてラーニングポートフォリオの意見交換を行い、各班の検討結果をまとめて発表しました。ラーニングポートフォリオに関しては、インターフェースの改善や利用方法の提案など、ハード面、ソフト面の両方について有益な意見を収集できた点と、これまで漠然としていたイメージが取れ、ラーニングポートフォリオの利点や実際に利用する場合の手順などが体験でき、今後の展開が期待できる講習会になったと感じました。

また、ループリックによる評価やラーニングポートフォリオによる学習成果の可視化にしても、それを利用する学生がワークショップに参加して、教員および職員と率直な意見交換や情報の共有ができたことは想像していたよりも有益で、今後も教職学協働でのワークショップの実施を期待しています。

第1403回IR部門委員会ワークショップに参加して

工学部機械機能工学科・教授
教育イノベーション推進センター員
小野 直樹

このIR部門委員会ワークショップでは、今回は小職が運営を任されることになり、内容の企画の段階からお手伝いさせて頂きました。今回はMIMAサーチに焦点を絞り、その体験実習を通じて、参加者(教員、職員、学生)自身や各自の学科や大学全体への活かし方の議論ができれば、という思いで企画しました。

(1) MIMAサーチについて：数年前から本学にも導入されているサーチエンジンであるが、本学に適した使い方が十分検討されていないためか、広く使ってみようという機運が盛り上がりません。すでに実績のある電子情報システム学科での使用例を学び、まずはその効用についてのレクチャーを受けました。電子情報システム学科では、年次が上がるに従い、大きく3つの分野に分かれて学修していきます。その後、それぞれの分野に属する研究室に進んでいきますが、分野ごとに学んでおいて欲しい講義群が異なります。学生の意向や希望によって履修しておくべき講義を学生と教員が確認することは大切で、ここにMIMAサーチが活かされていることが分かりました。

(2) 本学での活用方法：学科レベルで考えた場合、JABEE学科の場合には既に履修計画が固まっているために自由度が少なく、活用の余地は少ないかもしれません。しかし3・4年生の選択科目には、各学生の指向性を反映させるために使えると思います。むしろ現在構想が進んでいる建築学部にも、新しいカリキュラム設計のためにうまく活用できるのではないのでしょうか。既存の各学科の各講義内容をシラバスから構造化して視覚化し、カリキュラムの再編成時に有効活用できるかもしれません。また、シ



ラバスを英語化しておけばMIMAサーチが利用できるもので、留学生が海外の大学から本学に編入等で移ってくるときに、自分が学んだ科目との整合性や連続性を事前に調べることができ便利です。留学生の呼び込みに活かせるかもしれません。

(3) 学生へのメリット：今回はLF(大学院生)や学部生が10名も参加し、積極的に意見を述べて頂きました。「MIMAサーチの結果の表示が複雑で分かりにくい」「そもそもシラバスの書き方(内容)から考え直さなければ、(1)(2)と連続する授業の関連も表示されない」といった率直な意見も飛び出しました。一方、学生目線ならではの意見として、学生が将来就職したい産業分野を踏まえて選択科目などを選ぶ時に、キーワードを用いた逆引き機能でMIMAサーチを使え(既に技術的に可能)、就職活動にも有益との意見がありました。

(4) グループ討議の発表：ワークショップの最後には各班から議論のまとめを発表して頂いたが、全ての班から何と学生が発表者として立ってくれました。自分達の教育および教育環境に対して積極的に関与しようという姿勢が見られ、とても感激しました。

(5) 今後に向けて：参加者全員の協力、および学術情報センター関係者の準備のおかげで、MIMAサーチエンジンの本学での活用に向けての利点や課題点について活発に議論できたのではないかと思います。少しずつずうずうしいお願いかもしれないが、美馬先生にも一緒に本学での活用について考えて頂くなど、お知恵をお借りできればよいと感じました。

修学の継続に向けた “こころの健康”を守る取り組み

教育イノベーション推進センター・教授
教育・学習支援部門長

徳永 幸生

入学した学生が、最後まで勉学を全うし大学卒業資格を得ることは、各人の人生にとって極めて大切です。これは何らかの理由により勉学半ばで挫折し、中退した者のほとんどは正職に就いていないことから明らかです。教育・学習支援部門は、学生の満足度の向上とは別の側面から、学生の学修意欲を掻き立て、修学を継続させるための取り組みを行うことを使命としています。

具体的には、全学に共通する教育・学習支援に関わる事項について種々の課題を取り上げ、関係する学部・部門と協力し解決に向けて具体策を協議し実行することです。その一環として、本年度は学生・教職員健康相談室と協力して全学部・全学科の新入生を対象にした「メンタルケア授業」を開講しました。授業アンケートの結果は、速報としてニューズレター第2号に一部掲載しましたが、9月で全学部・全学科の授業が終了したので、改めて報告します。多くの学生たちからは有用であったとの高い評価を得ましたが、同時に、来年度以降も継続するに当たっては、開催時期、授業形態など改善すべき項目も明らかになりました。

新入生向けの講義は、「学生自身が自らのストレス状態を把握し、生活の見直しやストレスの対応を必要に応じてコン

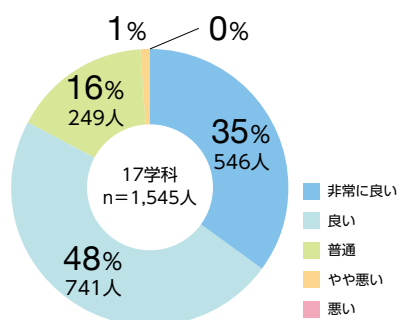
ロールできることが大切だとの認識に立ち、学生に対し、自らのストレス状態を把握する方法や、ストレス・コーピングについて情報提供を行う」という、一般的な内容でした。一方、中退した学生たちとの面談などから、「学業や人間関係の行き詰まり」「就職活動での圧迫面接などによる心理的ダメージ」など、3年後期に入ると、研究室配属や就職活動が引き金となって起こるストレスが多々発生していることが分かりました。このようなストレスが発生し始める直前の3年生に対して予防教育を行い、ストレスに関する正しい知識を持つことが、学生のこころの健康を守ることになります。

そこで、学生・教職員健康相談室カウンセラーの佐藤速人先生にその授業を担当していただくこととし、本年度は希望する学科を募り試行することにしました。これまで3学科で開講しましたが、アンケート結果にあるように、この授業も多くの学生から有用であったとの高い評価を得ています。

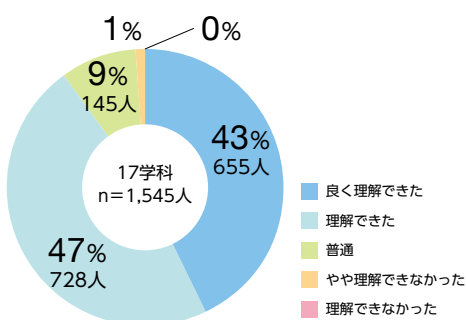
この取り組みの狙いは、学生たちの“こころの健康”を守り、最後まで勉学を全うさせ、そして一人でも多くの学生を社会に飛び立たせることです。本年度の試行結果を見ながら、来年度以降の本格実施に向けた検討を進めていきます。

2014年度新入生メンタルケアガイダンスアンケート結果

Q1 講演の内容について



Q2 講演の内容を理解できましたか

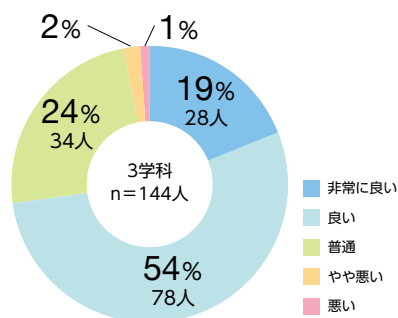


受講した学生の感想・意見

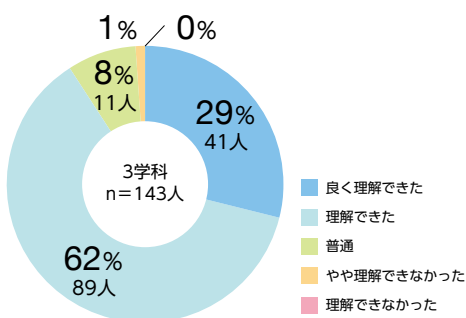
- ・「相談できる場所・人」。自分が思っている以上に多くの人に相談できるんだと感じた。
- ・新しい環境の中、誰もが精神的に不安になります。自分には関係ないと思わないで、日々考えていきたいと思います。
- ・大学生活で勉強も大切だが、やっぱりメンタル、心の悩みがとても多いので、このような講演会が、似たようなものをするべき。
- ・最近話題となっている問題について、興味はあったけど、このように詳しく聞ける機会が無かったので、とても良かったです。
- ・自分のためになりました。非常に興味深い話がきけてよかったです。自分が非常に思いこまれた時は相談しようと思いました。

3年次メンタルケアガイダンスアンケート結果

Q1 講演の内容について



Q2 講演の内容を理解できましたか



受講した学生の感想・意見

- ・キャラクターを用いて自分の思考の歪みを認知できて、わかりやすかった。
- ・圧迫面接について知っておくことができて良かった。
- ・就活はメンタルが重要だと思うので、強くなるということではなく、弱さを知ることでより良い精神状態になると思った。
- ・圧迫面接の存在を知ることができただけでも、心してかかることができるので良かったです。
- ・友人や相談室に頼る大切さを改めて知った。
- ・ついつい頑張りすぎて体調をくずすことが多く、セルフコントロールすることは、研究や普段の生活を健康的に送るために非常に重要だと思いました。

「授業における創意工夫」実践事例シリーズ

第1回

ビジネスエスノグラフィ

工学マネジメント研究科 (MOT) 准教授

平田 貞代



エスノグラフィは文化人類学の研究方法のひとつです。離島の住人達の文化や社会のマイノリティの人々が抱える問題といった知られざる実態について、現地へ外向き人々と共に生活し仲間となることにより、理解する研究です。エスノグラフィは、アンケートの設問や統計の設計には適さない希少なデータ、未だ誰も仮説を立てていない新しい因果関係、潜在的な要求や問題を把握したい場合に効果が期待されます。一方、数年がかりの調査を要するという難点もあります。

そこで、本講義では、離島やマイノリティの代わりに、受講生が簡単に関わることができる人々を対象とし、身近な製品やサービスのニーズの抽出や作業の改善といったテーマに取り組みます。

図1に示すとおり、各受講生はフィールドワークとして現場で関係者達と共に過ごし無心に記録した結果を持ち寄り、講義で討議します。講師は各受講生の理解度や関心に合わせて支援し、復習や予習を促します。記録・討議の体験を繰り返す度に、エ

スノグラフィに対する疑問が解け実践力が向上します。同時に、現場で仲間となった関係者達が抱える要求や問題に気づき、事実を根拠とした対策を受講生同士で競って対策を検討するようになります。選りすぐりの希少な事実や有効な対策は、各テーマに関係する企業へ報告します。

例えば、塩こうじを食べる知人達の体験から得た気づきに基づき、会津天宝醸造(株)様へこうじを用いる新製品についての印象やニーズの報告や新製品名を提案し、テレビやスマートフォンを利用する親族の生活習慣を整理し、(株)ビデオリサーチ様へメディアの新たな利用方法について報告を行いました。追加調査の依頼、新製品や新サービスの一部へ反映、といった各社からの反応に、受講生・講師共に一喜一憂しながらエスノグラフィの更なる改良に励みました。

工学マネジメント研究科(修士課程)の本講座は1クラス20名前後が受講します。この講義は企業や校外のセミナーでも実施しており、1クラス100名以上の場合でもほぼ同様に進行し

ています。

この講義のねらいは、エスノグラフィの習得ではなく、エスノグラフィを武器としてビジネスや社会の課題解決に主体的に貢献すること、そのために必要な観察力・洞察力・説得力を鍛えることです。大学を出た後に、本学で履修した各講義の知識や能力を実践して欲しい、ビジネスや社会の即戦力となって欲しい、という強い願いをこめて、講義を進行しています。

この講義では、受講生達やエスノグラフィの関係者達の間に、ライブコンサートに似た一体感や臨場感が生まれます。エスノグラフィをもっとやりたいというアンコールを期待して、進行役の講師はファシリテーションを続けます。教科書に従い進行する講義に比べ緊張が高い分、講師である私自身の観察力、洞察力、説得力も鍛えられ、受講生達を通じて微力ながらビジネスや社会における課題解決に貢献できる喜びがあります。修了生が「こんな現場で実践して役立った」という体験を後輩に伝えに来てくれるという励みもあります。

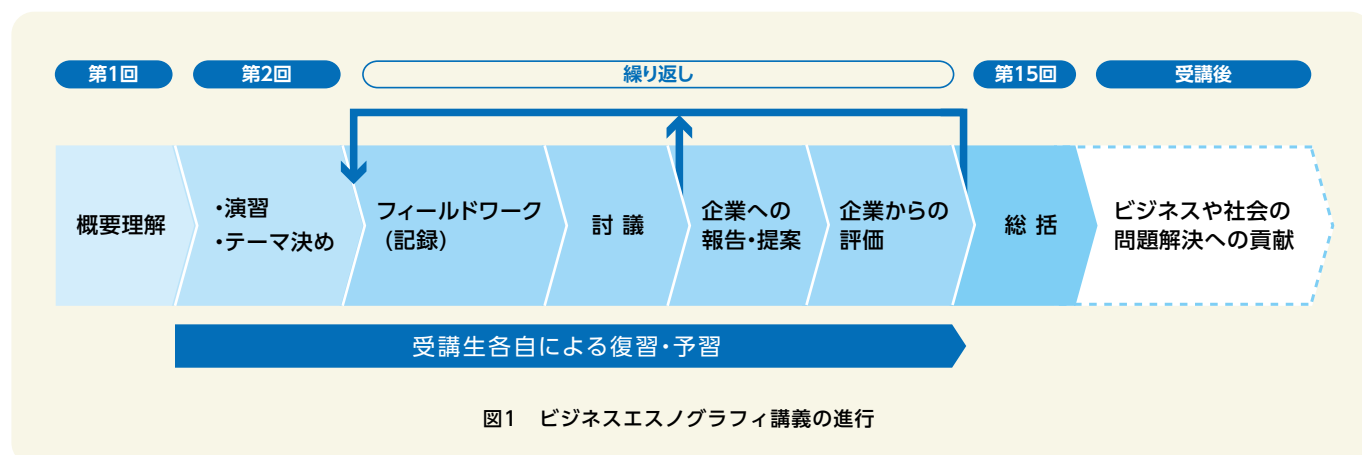


図1 ビジネスエスノグラフィ講義の進行

平成26年度教育改革ICT戦略大会に参加して

工学部機械工学科・教授

角田 和巳



平成26年9月3日から5日の三日間にわたり、アルカディア市ヶ谷（私学会館）において「教育改革ICT戦略大会」が開催されました。本大会は、公益社団法人私立大学情報教育協会が主催する大学教職員を対象とした事業の一つであり、初日の全体会、二日目のテーマ別自由討議、三日目の講演発表によって構成されています。参加者総数は毎年300名を越え、本年度の大会も例年以上に盛況でした。「改革行動の展開に向けて」をテーマに掲げた本年度の大会では、主体的・能動的な力の育成を主な論点として、教育改革を推進するための戦略が集中的に討論されましたが、ここでは特に参加者の関心が高かった話題を初日と二日目のプログラムの中から紹介します。

一つ目は、長崎大学の教養教育改革に関する事例です。これは、教養教育のカリキュラムにモジュール方式（複数のテーマのもとに集められた科目群（モジュール）の中から学生が興味のある科目を履修する方式）を採用し、一つのモジュールを数名の教員が連携して担当しながら、各科目の授業をアクティブ・ラーニングで実施するというものです。アクティブ・ラーニングの設計においては、学生の気づきを誘発するための適切な「問い」が重要であること、Student Assistantによる

授業コーチングが有効であることなどが強調されていました。

二つ目は、JMOOC (Japan Massive Open Online Courses) で実施された反転授業の実践報告です。日本初の本格的なMOOCサイト「gacco (ガッコ)」で最初に反転授業を行った東京大学の本郷和人教授が、実際の資料や当日のタイムテーブルを引用してその運用方法を紹介するとともに、大規模公開オンライン講座が社会にもたらす影響を示されました。学ぶ意欲を持つ人々たちにとってJMOOCが非常に魅力的な学習環境であることを再認識すると同時に、今後の大学教育の方向性について考えさせられる内容でもありました。

反転授業については、二日目のテーマ別自由討議でも取り上げられ、山梨大学での試行が紹介されました。一般的な工学専門科目で実施された反転授業の効果を成績データに基づいて検証しており、教室での授業設計が最も重要であることなど参考になる指摘も多く、説得力のある講演でした。

以上、三日間の大会のごく一部について紹介させていただきました。大学教育改革の様々な課題について理解を深め、情報を共有する機会として、教職員の皆様に本戦略大会への参加をお勧めしたいと思います。

SPOD (四国地区大学教職員能力開発ネットワーク) への参加について

工学部 共通学群 数学科目・教授

西村 強



SPODは、私が初めて参加させて頂いてから今年で5回目となり、私は6年前の初回にだけ参加していないことになります。ホスト校は第1～3、5回が愛媛大学、4回が徳島大学、6回が高知大学です。SPODでは四国の大学をターゲットの中心として教員・職員の研修が行われていますが、毎年8月下旬の研修企画への参加者は日本全国に及んでいます。研修というと通常は教員だけであったり、職員だけということも多いですが、ここでは教員・職員を同時に同じ場でということも多く、それが特徴の一つになっています。さらには、学生が研修に加わったり、サポートを行うということもあり、この点は出色です。勿論、教員或いは職員独自の研修も有り、かなり多岐に渡ります。その一つ一つがただ講演を聴講するという形態では無く、5～6人の班を組んで班ごとにワークがあるので、緊張の中で真剣に課題に取り組まなければならないよう計画されています。

私がこの研修に最初に出てみようと思ったのは、純粹に他大学の状況や取り組みの様子が知りたいと考えていたからです。しかし、現在まで参加している目的は、当初と少し異なります。

まず、当然のことですが、大学におけるプライオリティーは、学生の学びということであり、そのことを確認できることにあります。加えて、少しでも自分の取り組みに役に立てようという思いで参加されている各地の教職員の中に入ることによって、自分自身でも少し頑張ってみようかと思えることにあります。国立総合大学での取り組みの紹介がベースになっている研修もあるので、私学でそのまま取り込もうとすると大変な事項もありますが、芝浦工大のような工業系大学に対しての切り口、ヒントが得られるかもしれないこと。現在、自分の大学に何が不足していて、どのような意識、取り組みが必要なのか。ということを知識や感覚として身につけられることも挙げられます。

常に参加して感じさせられることは、教育の場においては、きれいな言葉、記述だけで糊塗するということでは無く、マクロ、ミクロレベルを問わず、常に教員も職員も実践であるということです。SPODでは、本学の場合、多くの大学に比べ、職員の参加が少ないのですが、是非多くの教職員に1回でも参加していただきたい研修と感じています。

SCOTとして経験したことと自身の成長

システム理工学部機械制御システム学科4年

樋口 将太 (SCOT 1期生)

私のSCOTとしての経験の中で、「通常業務」と呼ばれている業務が私を大きく成長させたと考えています。通常業務とは、教員との事前面談、授業観察、報告書作成、事後面談からなります。事前面談を設定するために、SCOTはメールでスケジュール調整を行います。依頼された教員がどのような人物であるか分からないので、メールには気を使います。特に、初めての業務の時は、どうしたら失礼がないか、何回も確認した上でメールをしていました。

事前面談は教員や授業のことをSCOTが事前に知ることを目的としています。最初は緊張してしまい、聞くべき情報以外の話を聞けませんでした。最近では、余談を交えながら、業務に必要な情報を細かいところまで集められるようになりました。

授業観察は、いつも新鮮でした。ある講義では私が学んだ方法とは違うアプローチに驚かされ、学んだことのない講義では初めて見る授業運営に驚きました。しかしここでは、授業内情報を記録することが一番の目的になっているため、それを忘れてはいけません。自分が見てきた授業や履修してきた授業が、今後提案することになる改善案の一つとなるため、授業観察から得られる感動は忘れないようにしています。

授業観察の後は、いよいよ報告書の作成です。報告書には、これまでの事前面談や授業観察で得られた情報から、事実や気になる点、改善案などを記します。事前面談から得られた教員の授業運営のスタイルやポリシーをふまえ、授業観察から得られた教員や学生の動きを客観的にまとめ、事後面

談を行うための資料として作成します。この報告書は、私が気になったことでも、他の学生はそうでもなかったり、教員としては譲れないところだったりすることがあるため気を使います。しかし、全てのことについて改善点なしとするのは、教員や学生、さらには大学のためにはならないので、授業をより良くするために教員に伝えた方が良いと判断される点は、はっきりと記すようにしています。

報告書が完成した後、最後の業務である事後面談を行います。事後面談では、報告書の内容を確認し、授業について教員とディスカッションをします。報告書にあげた気になる点については特に深く話をします。ここでも最初は緊張しましたが、事前面談と授業観察を先に終えていることもあり、しっかり話をすることができるようになってきました。

SCOTとしての通常業務に、私はこれまで10回程取り組んできました。その中で、様々な教員に出会いました。回を重ねるごとに、緊張の度合いは減り、社会人としてのやり取りの仕方が身につけて行くのが徐々に体感できました。今振り返ると、メールの書き方は良くなり、初対面の人との会話はスムーズにできるようになり、書類の作成も早くなり、気になる点の提示を話し合う方法も良くなってきたと感じています。

これらの経験が、私の就職活動にも強く影響しました。面接のためのメールは難なくこなすことができ、面接では、面接官に臆すること無く自分を売り込むことができたと思います。企業が求める人物像に、適切なコミュニケーションがとれる人をあげています。私は、SCOTとしての活動を通して、社会人として必要なコミュニケーション能力を高めることができ、それが認められたと考えています。

SCOTとは

FD・SD推進部門が進める活動の一つにSCOTがある。これは、授業に関するFD支援策である一方、SCOTに関わる学生を成長させる機会でもある。

(公財)日本工学教育協会 平成26年度工学教育研究講演会 オーガナイズドセッションに参加して

教育イノベーション推進センター (男女共同参画推進室)・教授

内藤 和美

8月28日(木)～30日(土)、広島大学で(公財)日本工学教育協会 第62回年次大会 平成26年度工学教育研究講演会が開催されました。同会に設定された「オーガナイズドセッションおよびワークショップ〈ダイバーシティの観点からみるリケジョの活躍〉I」で、本学の男女共同参画推進の取組について2題の報告を行うとともにパネルディスカッションに参加しました。「報告1 芝浦工業大学における男女共同参画推進の取組－女性研究者研究活動支援事業を立ち上げる－」(報告者中野美由紀)では、まず男女共同参画推進室の目的と目標・構成、各WGの活動の概要を説明しました。次いで、文部科学省科学技術人材育成費補助事業「女性研究者研究活動支援事業」に採択されたことで加速した取組として、男女共同参画推進シンポジウム、ワークショップ、意識調査、Shiba-jo プラチナネットワークの始動、女性教員増員の取組、女性教員の集いとそこから生まれたFab Girl Project、ライブイベント中の女性教員への研究支援員配置等とそれら成果と課題について述べました。「報告2 2013年度芝浦工業大学女子学生意識調査の結果から」(報告者 内藤和美)では、女性(少数者)が学びやすい大学、女性の理工系人材を育成できる大学への取組み促進の基礎資料とすることを目的に実施した「2013年度芝浦工業大学女子学生意識調査」の主要な結果とそこからの示唆を報告しました。この調査は学部生は「女性が少ない環境で女性が少ない分野を専攻する中で感じること」、大学院生は大学院進学理由に着目して行ったものです。

広島大学相田美砂子副学長の基調講演「広島大学における男女共同参画の取組み」に続いて行われたパネル・ディスカッション(パネリスト:相田、新潟大学 中野、広島工業大学 川上、内藤、中野 以上敬称略)を通じて、とくに次のことが銘記されました。

- ・大学の男女共同参画推進とは、大学の方針の明示→課題設定と課題認識の形成→取組の組織化、という流れを成熟深化させることである。
 - ・こうした流れの成熟深化に不可欠なのが「決定権をもつキーパーソンが存在」と、むりやりの説得や調整ではなく「データ収集→適切な分析→適切な方針→納得して実行」という過程を踏むことである。
- 芝浦工業大学の男女共同参画推進の取組を知って頂くとともに、他機関の取組と交差させる貴重な機会となりました。

男女共同参画推進室の構成

